

角川書店の『昭和文学全集』の変化

田 坂 憲 二

一

筆者はかつて、一九五〇年代の『現代日本文学全集』から、一九九〇年代の『ちくま日本文学全集』に至る、十種類の筑摩書房の日本文学全集の類を取り上げ考察してみた。⁽¹⁾ 日本文学全集の出版を通して、戦後の世相、特に文化史について鳥瞰してみたかったからである。筑摩書房のものをサンプルとして取り上げたのは、四十年間という長期間にわたって、多くの種類の日本文学全集を継続して出版してきた唯一の出版社だったからである。さらにその全集が、常にその時期の最高水準であったからであることは言うまでもない。

しかし筑摩の日本文学全集は孤立して存在するものではなく、他の出版社の同様の企画と相互に影響を与え合い、切磋琢磨することによって、常に新たな生命力を付与され、読者層をも拡大し、長期間の継続が可能となったのである。

その意味で、筑摩書房が最初に手がけた日本文学全集である、『現代日本文学全集』の誕生の背景を探ることは重要であろう。一九五三年という時代を考えると、ほとんど奇跡的とも言って良いすぐれた出版であるだけに、何らかの形で手本、あるいは目標となった他社の全集の存在があるはずである。書名が共通することから明らかなように、戦前の改造社の『現代日本文学全集』が発想の大きなヒン

トの一つであつたことは間違いない。⁽²⁾しかし、それ以上に、前年から刊行を開始した角川書店の『昭和文学全集』の与えた影響は極めて大きいと思われる。⁽³⁾出版文化史の上でも、『昭和文学全集』は、「質量ともに戦前におとらぬ文学ものの全集」⁽⁴⁾として、戦後の文学全集ブーム⁽⁵⁾の先駆けとして位置づけられている。

そこで本稿では、角川書店の日本文学全集の類を取り上げて考察してみたい。角川書店は、いくつかの名前の日本文学全集の類を出版しているが、十年の歳月を隔てて『昭和文学全集』という同じ名称の、中身の異なる全集を二度手がけており、最も思い入れの深いシリーズと思われるので、これを本稿の表題とした。これに加えて、いくつかの日本文学全集の類を併せて検討してみることとする。

猶、今回も定点観測として、「川端康成集」をサンプルとして論ずることが多い。使用した資料は特に断らない限り初版によつた。また、原則として巻数はアラビア数字に、年号は西暦に、作品名は新漢字に統一した。

二

創業三十年を記念して刊行された、一種の社史である非売品の『筑摩書房の三十年』⁽⁶⁾によれば、『現代日本文学全集』の淵源は、一九五三年初め頃の編集会議で臼井吉見が

提案した「国民文学全集」の企画であつたという。その経緯に関連して次のように記される。

この企画を出したのは、前年の十一月から配本がはじまつた角川書店の「昭和文学全集」が成功したことも、動機のひとつになつていたかもしれない。横光利一の『旅愁』が第一回配本で、好調なスタートを切り、苦境にあえいでいた角川書店を安泰にした。

臼井の提案は、当時の筑摩の財政状況や規模を勘案して、一度は否決されるのだが、「純文学、大衆文学の枠を外して」という国民文学の構想から、純文学の分野に大きく舵を切った「現代日本文学全集」という計画に改められ、当時の専務取締役の竹之内静雄の強力な後押しもあつて、同年四月に正式決定、八月の第一回配本に向けて、一挙に走り出すこととなる。内容見本一つにも様々な工夫がこらされた。前掲書には、「再度次のように記されている。

競争相手に角川書店の「昭和文学全集」があつた。これを追う立場にあつた「現代日本文学全集」は企画・造本等あらゆる点で、全社をあげて真剣に取組んだ。

自社の社史に、このように、二度にわたつてその名前を記していることから、角川書店の『昭和文学全集』が、いかに強く意識されていたかが推測されよう。

事実、本文三段組の基本的なスタイルも、巻頭に著者の

写真と筆跡を置くことも、巻末に解説と年譜を付すことも、全八頁の別冊月報を添えることも、すべて角川書店の『昭和文学全集』と筑摩書房の『現代日本文学全集』とに共通するのである。後者は前者を強く意識し、前者を追い越すために、様々な工夫を凝らした。その最たるものが本文用紙である。これらの全集の刊行から約半世紀を経た今日、両シリーズを手にとってみるとその差は歴然としている。本文用紙に特漉上質紙50听を使用した『現代日本文学全集』の方は、保存の良いものであれば昨日刊行されたばかりのもののようで、半世紀の歳月を全く感じさせない⁽⁷⁾。

これに恩地孝四郎の装幀と相まって、その造型美は眼を引くものがある。『昭和文学全集』に比べると、天地を約一センチ大きくしたことも読みやすさを保証することとなった。しかし、このような成功も、先行する『昭和文学全集』という格好のお手本があったからこそなしたといえよう。『昭和文学全集』を「追う立場にあった」からこそ「全社をあげて真剣に」取り組むことができたのである。

『昭和文学全集』への対抗意識の強さは、『現代日本文学全集』の初期の配本にも現れているのではないか。第一回配本が「島崎藤村集」であるのは、この作家の国民的人気から言っても、筑摩書房の地縁から言っても、社名の由来

から言っても⁽⁸⁾、当然の帰結であるが、もう一つ見逃してはならないのは、『昭和文学全集』の方では、「島崎藤村集」は、この時点では含まれていなかった点である。それだけに、藤村の『若菜集』『破戒』から始まる新しい日本文学全集のインパクトは極めて大きかったであろう。『現代日本文学全集』は、第一回配本の「島崎藤村集」以下、芥川龍之介、森鷗外、斎藤茂吉、井伏鱒二、佐藤春夫の順に刊行するが、鷗外、茂吉、井伏、春夫は、いずれも角川の『昭和文学全集』(第一期)には含まれていない作家である。購買意欲をそそるためにも、角川版では読むことのできない作家を巧みに並べている。偶然の一致かもしれないが、少なくとも結果的には大きく弾みをつけることに一役買ったであろう。あるいは、角川書店との平和共存をはかったと言えるかもしれない。猶、「芥川龍之介集」は、角川・筑摩共に五三年九月の刊行であり、これは両者が正面からぶつかったこととなった⁽⁹⁾。

このように、筑摩書房の『現代日本文学全集』の良き手本であり、競争相手でもあった、『昭和文学全集』とは一体どのようなものであったのか、次節以降で詳しく見てみよう。

三

角川書店が『昭和文学全集』の刊行を開始したのは、一九五二年十一月のことで、この月第1巻「横光利一集」第2巻「山本有三集」が刊行されている。「横光利一集」は、この年のベストセラーの第七位に入る大健闘であった。⁽¹⁰⁾以降、ほぼ原則として、一月に二冊の配本がなされ、以下順番に、寅彦、文六、荷風、多喜二・重治・直、志賀、百合子、川端と続く。第一期は全二五冊の予定で、ほかに実篤、賢治、芙美子、石坂など昭和前期の代表的作家をほぼ網羅し、詩人としては光太郎・朔太郎、新進作家としては大岡・三島あたりまで含まれている。第10巻に安部能成・天野貞祐・辰野隆集があり、ほかに、阿部次郎や小宮豊隆など、教養主義的な側面も有するのがこの全集の特色である。巻序と刊行順は完全に一致するが、前述した刊行初期の作家の配列から明らかなように、巻序は作家の生年や活躍時期の順ではない。第一期全二五冊の完結は五三年十一月である。二五巻中（別冊の漱石は除く）、単独の作家は一六人、抱き合わせの巻は九冊である。これが、第二期になると、全三三巻中（別冊の鷗外は除く）、単独の作家が一人、抱き合わせの巻が二二冊となり、両者の比率は逆転する。既に刊行の始まっていた、筑摩の『現代日本文学

全集』に対抗するためにも、第二期ではできるだけ多くの作家を網羅する必要性に迫られたのであろう。

第一期の完結から間をおかず、翌月、五三年十二月に第26巻「吉川英治集」第27巻「小泉信三集」の同時配本で、第二期がスタートする。この配本に明らかなように、娯楽性・教養性両睨みの布陣といって良からう。次節で述べる如く、当初、二六冊の予定で始まった第二期の冊数は、次第に増加し続け、最終的には別冊を除いて三三冊となる。本編五八冊、別冊二冊の、全六〇冊が完結するのは、一九五五年五月であり、第一期から通しても、約二年半のスピード配本であった。当時の出版や流通事情を考えると、このような素早い刊行を成し遂げたこともまた驚嘆に値するが、その背景には予約購読を推進したと言うこともあったのではないだろうか。

『昭和文学全集』は、約三十年前の、円本全盛期⁽¹¹⁾の全集の予約に倣い、予約金を取る形で、部数の確保に努めたようである。当初の申し込み方法については、次のような形であった。

予約申込金、金壱百円（最終回費の一部に振当）を、
第一回配本代金と別に御拂込下さい。但し一時拂は予約金を徴収している以上、刊行の遅延は許されず。出

版社としての信用そのものに関わるからである。そのため、第二期では、次々と追加の巻が出て巻数が漸次増加しつつも、刊行期間に空白はなく、完結にこぎ着けている。

この全集は、A五判四〇〇ページ平均、三段組で、一期、二期を通算すると、最終的には五八冊に別冊二冊の全六〇冊である。ページ数は当初は三五〇ページ平均の予定であったが、第7回配本「志賀直哉集」から増ページされ、四〇〇頁平均となった。この前後の配本のものには、「愛読者のご支援に應え 増頁断行!!」というチラシが挿入されているものがある。所収作家は、第1巻の横光利一、第2巻の山本有三から、第58巻の下村湖人まで、昭和前期を代表する百人近くの作家が含まれている。谷崎潤一郎、山本有三、石坂洋次郎の三人だけが二冊を割り当てられているのが目を引く。当時の国民的人気作家といったところだろうが、増巻の事情もあるのかもしれない（次節参照）。別巻の二冊は、「夏目漱石集」と「森鷗外集」であるから、〈昭和〉という名称を冠したがゆえに当初は含むことの出来なかったこの二大文豪を、別冊という形で遇したのである。ところでこの二冊は、全巻予約購読者に無料進呈されたものである。たとえば、第9回配本の「川端康成集」の月報の最終ページには「最終巻までご購読の方に夏目漱石集 無料贈呈」と題して次のように記されている。

る。

第一期第二十五巻まで、お買いあげの読者に對して、別冊（全集と同型・同装幀）夏目漱石集を無料進呈いたしますことが、月報前號及び新聞紙上に發表されましてより、全國無數の愛読者の方々から、多大の御好評を賜つてをります。……尚漱石集配本は、最終巻と同時に行ひます。

右の記事から分かるように、この特典は、『昭和文学全集』の刊行当初から設定されていたものではない。最初に予約募集をした折りの内容見本にもそのことはまったく記されていない。販売のてこ入れのため、「昭和」ゆえに取り込めなかった漱石を含めるため、急遽計画されたものである。次節でも述べるが、この『昭和文学全集』は、編集方針が完全に固まってからスタートしたのではなく、刊行途中で様々な工夫が付け加えられていく。営業面に大きく寄与したであろう、「夏目漱石集」の無料配布という特典も、その一つである。その意味では、進化する全集とも呼ぶべきものである。逆にいえばそれは、戦後初めての本格的な日本文学全集を刊行する、開拓者の苦しみを示すものでもあった。

編集の工夫、進化という点では、「川端康成集」の作品収載にはつきり見て取れる。

五三年三月に刊行された、第9巻「川端康成集」の全収録作品は、順に『雪国』『伊豆の踊子』『禽獣』『虹』『舞姫』『名人』『千羽鶴』『山の音』(第12章にあたる「傷の後」まで)の八作品である。ところが、前年秋に、『昭和文学全集』の企画が発表された時点の内容見本の「川端康成集」の項目を見ると、「雪国・舞姫・虹・花のワルツ・禽獣・他」となっていて、『名人』以下の三作品の名前がない。『他』の部分に含まれる可能性は皆無ではないが、戦後の川端文学を代表する『千羽鶴』と『山の音』を収載する予定であれば、当然売れ行き的大幅な増加が見込めるから、当初から記載するはずである。事実、先に引用した「増頁断行」のチラシには次のように記される。

さきに内容見本に各巻平均三五〇頁と豫告しましたが、第七巻志賀直哉集より各巻平均四〇〇頁に増頁し、新たに名作の數篇を加へ、内容の充實完璧を期しました。(川端康成集に「千羽鶴」「山の音」の二篇を加へ、又谷崎潤一郎集に「少將滋幹の母」を加へました如き、その一例です)

実際の第9巻を見ると『千羽鶴』『山の音』だけで約一三〇ページあるから、五〇ページの増ページで処理できるものではない。また、第9巻は全三八〇ページで、これは「平均三五〇頁」とっていた時の第一回配本の「横光利

一集」と同じページ数である。「平均四〇〇頁」にはまだ余裕があり、増頁云々はむしろ格好の口実で、何らかの事情で、当初は確約が取れなかったこの作品を、収録が決定したので差し替えたのであろう。『花のワルツ』並びに『他』に含まれていたいくつかの作品と入れ換えられたのである。

実は、『千羽鶴』と『山の音』は、経営危機にあった筑摩書房を救った本であったのである。「千羽鶴」の書名で、五二年二月に刊行された、小林古径の装幀の豪華本は「敗戦後の豪華版の走りといわれるような出来栄¹³⁾」で、「翌三月に出た普及版は二十万を越えるベストセラーになり、「瀕死の筑摩書房を甦らせた」のである。芸術院賞受賞という追い風もあって、豪華本の方も、六月には限定五百部版、八月には特製版を出し、九月から刊行の始まった『現代日本名作選』のシリーズでも、藤村の『春・桜の実の熟する時』、大岡の『武蔵野夫人・野火』などとともに、まっ先に刊行された。いわば、筑摩のドル箱であった。それだけに、『昭和文学全集』の計画の段階では、この二作品の確約が取れなかったのであろう。あるいは交渉中ということであつたのかもしれない。

ともあれ、この二作品の収載が決定したことは、角川側にとっても大変有利なことであつた。この時点で川端は、

最終的に『山の音』として結実する物語を、断続的に執筆中だったから、筑摩の普及版以降の「朝の水」「夜の聲」「春の鐘」「鶏の家」「都の苑」「傷の後」の話を含めることが出来たのである。¹⁴ 替わって、川端の戦前の秀作の一つで、かつては新潮社の『昭和名作選集』に収められ、この数年後に刊行される瀟洒な全十巻の『川端康成選集』¹⁵の第5巻の表題にもなっている『花のワルツ』が、姿を消すこととなったのである。

『昭和文学全集』は、所収作品のみならず、どの作家を入れるのかという選択についても、紆余曲折があったようで、特に第二期においては、絶えざる変更・修正が繰り返されているようである。そのことについては、節を改めて述べたい。

四

紀田順一郎に『内容見本による昭和出版史』という書物がある。本の雑誌社の「活字倶楽部」というシリーズの一冊として刊行されたものだが、¹⁶ 紀田らしい、面白い切り口の試みである。同書一〇七ページ以下に、角川書店『昭和文学全集』も取り上げられ、一〇八ページには内容見本の写真も添えられているが、その内容見本には「第一期二十六巻 各二八〇円」「待望の自由分賣」などと記されている。

る。ただ、この内容見本は、『昭和文学全集』刊行当初のものではない。「自由分賣」とあることから分かるように、第一期完結以後のものである。¹⁷ 実は、『昭和文学全集』は当初の刊行予定編目がしばしば変更されており、その変更の都度、新しい内容見本を作る必要があった。それらを比較することによって、『昭和文学全集』のいわば、編成過程を追うことができるのではないだろうか。紀田が使用しなかった内容見本も使って少しく考えてみたいと思う。

手許に蒐集できた、『昭和文学全集』の内容見本は四種類である。このようなものの性質ゆえ、それぞれの製作・配布時期を詳細に究明することは困難であるが、可能な限り推測してみたい。また、これ以外の時期の内容見本についても引き続き調べてみたい。

『昭和文学全集』の最初の内容見本は、第一回配本予定の「横光利一集」を表紙にあしらったものである。裏表紙には「昭和文学全集豫約規定」があり、頒布方法、刊行期日、申し込み方法、会費などについて記された上で、天に横書きで「申込締切 十一月三十日かぎり」と大きく朱書されている。綴り込みの申し込み葉書にも「昭和二十七年月日」と、申し込みの月日を記入する欄が印刷されており、この内容見本は同年の初秋ころには配布されたもので

はないだろうか。

この刊行直前の内容見本に記された編目は、最終的に完結した第一期のものと変動がある。川端の『千羽鶴』や谷崎の『少将滋幹の母』の名前が見られないことは前節で言及した。それ以外にも、やや大きな相違がある。この段階では単独の巻の予定であった「小林秀雄集」は、実際には「小林秀雄・河上徹太郎集」の形で刊行され、その関連で、当初の「河上徹太郎集・亀井勝一郎集・中村光夫集」が「亀井勝一郎・中村光夫・福田恆存集」と変更されている。また、当初は「芥川龍之介集・堀辰雄集」という抱き合わせの予定であったものが、それぞれ独立させて一冊が割り振られている。芥川の単独収載というのは当然の変更のようでもあるが、筑摩書房が『現代日本文学全集』の第二回配本に「芥川龍之介集」を予定したと何らかの関係があるのかもしれない。ともあれ、芥川・堀の分離独立によって当初の予定より一冊ふえることになる。「一時払いは全巻二十五巻で六千参百円」という会費を設定していたから、総巻数の枠は守らなければならない。結局、ふえた一冊分の替わりに、当初予定されていた「現代詩集」が見送られることになる。「現代詩集」は第二期に「昭和詩集」の形で復活することとなる。

このような小異はあるが、第一期の分については、当初

の計画の微調整の範囲内で完結したと言って良い。これが第二期にはいると、所収作家の追加が絶えず行われ、当初は、全二六冊（別冊森鷗外集は除く）の予定でスタートしながら、最終的には三三冊（同）にまで増加している。そのあたりの変化の過程を、内容見本によって見てみる。

まず、表見返しに「昭和文学全集ができるまで：」、裏見返しに「完成近き新社屋の偉容！」とある、第二期刊行に際して、最初に作成された内容見本の表紙には、「第二期・二十六巻」と明記されている。ただし七ページには、「第二期二十六巻内容一覧」と白抜き文字で大書した下に、小さく「追加二巻交渉中」と記されている。十六ページの予約申込規定にも、「全巻一時拂の方は、金六千五百五拾圓を一月三十一日迄にお拂い込み下さい。（但し二巻追加の場合は別途に金五百圓を申し受けます）」とも書かれ、編集方針が流動的であったことが分かる。今回も第一期に倣い、一時払い以外の読者からは金百圓の予約金を取り、最終回配本時の代金に充当させている。建前上は全巻購入予約者を対象とした全集であった。⁽¹⁹⁾

内容的には、上記の内容見本に見える巻冊で、最終的に変更となったものは、以下のものである。「武田麟太郎・高見順・平林たい子集」の予定が「武田麟太郎・高見順集」と「平林たい子・壺井栄集」に、「中河與一・阿部知二・伊藤整

集」が「中河與一・阿部知二・芹澤光次良集」と「伊藤整集」に、それぞれ分冊され、単独収載予定の「大内兵衛集」が「長谷川如是閑・大内兵衛・笠信太郎集」に改編されている。「大内兵衛集」は巻数の増減を伴わないものであり、かなり早い段階で行われた。半年後の第二次予約の段階では既に変更されている。

増巻二巻の方針がほぼ確定的になった段階で、角川書店は第二期二十八巻第二次予約募集を行った。新しい内容見本の表紙は、緑地に「第二期二十八巻」「第二次豫約募集」云々の文字を記し、中央に第一期以来の全冊の箱の背文字をずらりと並べたデザインである。書影の中には、後に変更される「武田麟太郎・高見順・平林たい子集」の文字も見える。今回は「昭和二十九年五月下旬配本開始」とあるから、第二期刊行の開始から半年以内に、二冊増巻が決定的になり、第二次予約を募集したものである。猶、同時に、第一期の分は第四次予約募集がなされ、売れ行きが衰えていないことを思わせる。二十八冊になった今回の全巻一時払い金は、「七千八百四拾圓」であった。内容的には「続谷崎潤一郎集」が加わり、更に「追加一卷交渉中」と記されている。

第二期は、最終的に全三三冊となった。当初の二六冊から、伊藤整や平林たい子の分冊変更による二冊増と、続谷

崎を加えて、二九冊。残りの四冊は以下の通りである。第51巻「島崎藤村集」、第54巻「続山本有三集」、第56巻「続石坂洋次郎集」、第58巻「下村湖人集」である。藤村は、是非とも加えなかった作家であろうが、ここまで遅れたのは、全十九巻の『島崎藤村全集』を刊行している新潮社や、『現代日本文学全集』の第一回配本に藤村を持ってきた筑摩書房との折衝に時間がかかったのであろうか。²⁰あるいは「追加一卷交渉中」というのは藤村のことであつたのだろうか。結局、「島崎藤村集」は遅れに遅れ、『昭和文学全集』の第51巻に収録できた作品も『嵐』『伸び支度』『市井にありて』などであり、昭和以前の『破戒』や『新生』はもちろんのこと、『夜明け前』も『東方の門』も収載することは叶わなかった。また、山本有三や石坂洋次郎の続編も、当時の人気の反映ではあろうが、全体を見渡すとややバランスの悪い感は否めない。第54巻の「続山本有三集」に『女の一生』を収録したが、二年後の『現代国民文学全集』にも再度収められる結果となっている。これなども、急遽続編が設定されたことと関わるのかもしれない。

このように紆余曲折はあつたが、一九五五年五月に、角川書店の『昭和文学全集』は全六〇冊の堂々たる全集として、その全貌を表すこととなる。全巻完結後、別冊の「夏目漱石集」「森鷗外集」も含めて全六〇冊が分売されるよ

うになった。「全巻セット販売!」「自由分売!」の文字が踊る内容見本も作られている。「全冊セット販売」とは、第一期・二期を通算して、三〇冊ずつの二セットとし、約五%引きの特価販売も同時に行ったのである。分売の場合、一冊あたりの売価は二八〇円で、第一期刊行時点のものを守っているのは見事である。

五

角川書店は、『昭和文学全集』の完結からちょうど二年後、一九五七年五月から、全く同じ判型で、『現代国民文学全集』の刊行を開始した。今回の全集は、第3巻に野村胡堂、15巻に川口松太郎、28巻に直木三十五が単独で割り当てられ、また27巻は「現代推理小説集」であることなどから分かるように、大衆文学の分野に大きく枠を広げたものである。叢書名としては、『昭和文学全集』とは一見無関係であるが、装幀を見ると、明らかに姉妹版として企画されたものであることが分かる。たとえば、両者ともに外箱の下部約五分の二の部分にシリーズで統一された模様があり、更に少し短めの同じ模様の帯が掛けられている。表紙は、『昭和文学全集』が赤、『現代国民文学全集』が青地で、ともに同じポイントの活字で「川端康成集」などと金文字が刻されている。本文も同じ三段組である。箱のまま

でも、図書館などのように箱をはずした形でも、ページを開いても、両者が姉妹版であることは明白である。出版社の側もそれをはっきりうたっており、『現代国民文学全集』に帯のように付けられた、「売り上げ報償券」には、次のように記されている。

弊社はここに「昭和文学全集」の姉妹篇として「現代国民文学全集」(全二十六巻)を刊行いたしました。

本全集は各家庭でも安心して楽しく読める国民の全集であり「昭和文学全集」以上に幅のひろい読者層の支持を受けるものと信じます。この際格別の御芳情と御尽力により大らかに販売下さいますよう切にお願い申し上げます。

ただし、大衆文学のみで一つのシリーズを作り上げるのではなく、先のシリーズと共通する作家がかなりいる。⁽²¹⁾たとえば、『現代国民文学全集』の第1巻は「獅子文六集」であるが、所収作品は『海軍』(岩田豊雄)『青春怪談』『おばあさん』であり、『昭和文学全集』の『自由学校』『てんやわんや』『胡椒息子』と作品は重複しないようになっている。⁽²²⁾獅子文六の場合は、両シリーズの色彩の相違は必ずしも明確ではないが、⁽²³⁾川端康成の場合は、所収作品の違いが際だっている。

『昭和文学全集』第9巻(一九五三年九月、三八八ページ)

ジ、頒価二八〇円、地方売価二九〇円）では、『雪国』『伊豆の踊子』『千羽鶴』『山の音』『名人』『舞姫』等々と川端文学の代表作をすべて揃え、『現代国民文学全集』第23巻（一九五八年四月、三八二ページ、頒価三二〇円、地方売価三三〇円）では、『女であること』『川のある下町の話』のように、比較的通俗性の強い作品を集めている。川端康成のように、振幅の広い作家の場合は、このような棲み分けが可能であつただろう。²⁴ 猶、『昭和文学全集』には伊藤整の解説と、川端自身が作成した一九五二年までの年譜が、²⁵『現代国民文学全集』には山本健吉の解説と一九五七年までの年譜（昭和版を踏襲するが、一部微細な修正がある）が付載されている。

今回の全集は、上述したように、大衆文学の分野に大きくウイングを広げた点に特徴がある。上述した作家以外でも、村上元三、石川達三、源氏鶏太と並べればその色彩は明確であろう。また、文豪の所収作品でも、多少なりともその色彩を出そうとしているようだ。たとえば、『現代国民文学全集』第20巻「夏目漱石集」でもページの大半を『吾輩は猫である』に割り、『三四郎』『それから』『こゝろ』などの『昭和文学全集』との違いを打ち出している。それでは、娯楽性、通俗性ばかりを重視したかというところでもない。昭和という名称を冠したばかりに、前回は

収録できなかった、紅葉・鏡花・露伴・独歩などを今回は収録し、前シリーズの欠を補うという姿勢はかなり鮮明である。ある意味では柔軟かつしたたかな編集方針である。その、最大の成果は「島崎藤村集」に見られる。『昭和文学全集』では、第二期の51巻にようやく藤村の巻冊を設けることができたが、『嵐』『伸び支度』『市井にありて』というラインナップは、角川としては大いに不満であつたに違いない。満を持した今回は、シリーズの平均ページ数を大きく上回る五〇〇ページ以上の大冊を準備し、第19巻に『夜明け前』全編を収録している。

それ以外の特徴としては、14巻「青春小説文学集」、第34巻「国民文学名作集」、第27巻「現代推理小説集」などのアンソロジーにあるが、『伊豆の踊子』『坊っちゃん』『野菊の墓』等が収載される前二者の棲み分けについてはやや分かりにくい面がある。面白い試みは、第18巻「国民の言葉 百人百言集」や第36巻「国民詩集」である。特に、後者は、藤村・晩翠・鉄幹らの近代詩から、和歌、俳句、更には民謡、そして「孝女白菊の歌」「鉄道唱歌」から「鉾をおさめて」「東京行進曲」旧制高校寮歌までの近代歌謡、ヴェルレーヌ、ハイネ、キーツから讃美歌までの翻訳詩と、実に幅の広い詩歌が採取されている。「国民詩集」の名にふさわしいものである。

叢書名の由来は、当時文壇の議論の中心であった国民文学論の影響なども在ろうが、二年前の一九五五年から刊行されていた、河出書房の『日本国民文学全集』の影響もあったのではないか。『源氏物語』から漱石・藤村、『大菩薩峠』や『富士に立つ影』までという、極めて幅の広い『日本国民文学全集』は、現代という枠組みはあっても、純文学から大衆文学までという、『現代国民文学全集』のヒントになったのではないかと思われる。角川版の第32巻「中里介山集」には、河出の『日本国民文学全集』の目玉の一つであった『大菩薩峠』を、「甲賀一刀流の巻」から「白根山の巻」までの部分ではあるが、収録しているのである。

六

角川書店は、昭和文学や、昭和文学全集という名前は、深い愛着を持っていたようで、一九六〇年代に入っ
て、もう一度『昭和文学全集』というシリーズを企画する。一九六一年から六四年にかけて刊行された四〇冊の全集で、四六変型判で、二段組、平均五〇〇ページである。

十年前の、同じ名前の全集に比べて、判型を小さくした分、ページ数が増えた勘定になろうか。冊数も六〇冊から、四〇冊に減じ、所収作家も、菊池寛・倉田百三・小林多

喜二等々がはずれ、開高健・大江健三郎他が加わるなど、刊行時点に近い作家を優遇しているようである。

共通して含まれている作家の場合でも、第4巻「川端康成集」（一九六一年十二月、四八三ページ、三九〇円）の例で言えば、五三年刊の『昭和文学全集』以後の作品である『みづうみ』（『新潮』一九五四年一月・十二月号）を巻頭に載せ、清新さを打ち出し、以下『山の音』『千羽鶴』『雪国』『伊豆の踊子』の代表作四作と共に、骨格を形成させている。そのほかでは、『名人』『舞姫』の代わりに『十六歳の日記』『母の初恋』『たまゆら』などを入れて違いを出そうとしている。前回の『昭和文学全集』では「傷の後」の章までであった『山の音』は、「雨の中」「蚊の群」「蛇の卵」「秋の魚」の最終章まで全編が収められている。刊行当時は、外箱の上に、さらにぐると全体を覆う形で紙カバーが掛けられていたが、そこには「千羽鶴・みづうみ他」「川端康成」と記され、角川がこの二作をセールス・ポイントにしようとしたことが伺われる。猶、当初の内容見本では、川端の作品配列は「山の音↓千羽鶴↓雪国↓みづうみ（以下略）」で、微妙な変化はあるものの、角川書店の意を知ることができる。解説は進藤純孝が担当、年譜も随分詳細になり、一九六一年までの記事が十七ページにわたって載せられている。造本で言えば、下小口

を化粧断ちしていないという特徴がある。別冊の月報に当たるものが「アルバム」と記され、写真を多用したものであることも特徴である。このアルバムは巻冊ごとのページと、叢書全体の通しのページが併用され（川端の場合は、一六一六ページと、四九一六四ページのページ数が併用）、別冊のみ集めると近代文学アルバムとなるように工夫されている。²⁷ ヴィジュアル時代の先取りでもあったろう。また、外箱の上部に、縦六センチ弱、横二〇センチ強の紙が貼付されており、それには所収作品名などが記されているが、その一部に縦横約六センチ弱で名画がデザインされている。これは、巻毎に異なるもので、サファイヤ・セット第4巻「川端康成集」は安井曾太郎の薔薇、第18巻「宮沢賢治集」はアンリ・ルソーのヴァンサンヌの森、ルビー・セット第2巻（巻数の問題は後述）「野上弥生子集」はゴーガンの女の顔といった具合である。これなども、視覚的效果をねらったものであろう。表紙は清楚なクリーム色無地で、背表紙上部に小さく作家名・叢書名を箔押しにしたものとのバランスも良く、一転して見返しの鮮やかな赤との対照も印象的であった。装幀は原弘・永井一正である。所収作家を比較してみると、五〇年代の『昭和文学全集』に単独で取られていた作家で、今回漏れたものは、寺田寅彦、永井荷風、宮本百合子、徳田秋声、大佛次郎、小

泉信三、尾崎士郎、正宗白鳥、舟橋聖一、和辻哲郎、島崎藤村、下村湖人である。²⁸ 大佛次郎と舟橋聖一が漏れたのはやや意外な感じがするが、それ以外は、主たる活躍が戦前の作家である。明治・大正の文豪漱石・鷗外は当然除外されている。また、和辻・小泉の撤退に象徴されているように、教養主義的な部分は完全になくなっている。明らかに時代の変化を感じさせる。逆に、前回、背表紙に名前の見えなかった作家で、今回新たに登場しているのは、松本清張、有馬頼義、石原慎太郎、源氏鶏太、山崎豊子らで、やはり大衆性の強い作家の進出が目立つ。

このように、角川書店版の二つの『昭和文学全集』は、形態的にも、内容的にも、全く別個のものであるが、名称が完全に重なるために、書誌情報としては混乱する危険性がある。現に、『角川書店図書目録（昭和20—50年）』（一九九九年刊行）でも、共に「昭和文学全集」の名前で掲出されている。一九五〇年代または昭和二十年代の全集、一九六〇年代または昭和三十年代の全集というように刊行時期を付して呼ぶか、六〇冊版の全集、四〇冊版の全集というように冊数で区別するか、あるいは判型で呼び分けるかである。いずれの場合も、現物を実際に見る場合には問題はないが、書名だけでの情報の場合は注意を要する。特にカード検索や、インターネット情報の場合は、気

を付けねばならない。国立国会図書館では、一九五〇年代の全集をそのままのタイトルの「昭和文学全集」とし、六〇年代の全集を「角川版昭和文学全集」としている。

NACSIS Webcat 上での情報も同様の使い分けをしているが、実は、この「角川版」という表記は、箱と扉題（内題）の部分に小さく書かれているだけで、背表紙や奥付にはただ「昭和文学全集」とのみ記されているだけなのである。図書館では箱は廃棄されることが多いし、背表紙の文字で探すことが一般的であるので、やや分かりにくい恨みはある。

更に、このシリーズは、全四〇冊が、二〇冊ずつ一セットで、サファイヤ・セット、ルビー・セットと呼ばれている。もはや予約制ではなく、完全分売ではあるが、このようにセット名が、一種の全集の名前のように呼ばれた。まず、サファイヤ・セット二〇冊が六一年九月から、平均二か月に三冊のペースで刊行され、一年後の六二年九月に完結、翌十月から毎月一冊ずつルビー・セットが刊行された。前記、角川書店の目録では、全冊通して四〇冊とされているが、当初は、それぞれ、1から20までの通し番号が記されていた。上述した「野上弥生子集」は、ルビー・セットの第2巻だったのである。サファイヤ・セットの場合は、セットの通し番号はそのまま全集合体の通し番号でもある

が、後から刊行されたルビー・セットの場合、セットの通し番号と、全体の通し番号が一致しない。「野上弥生子集」の場合、箱と本体の奥付には、ルビー・セットの2巻目ということ、「2」という数字が、本体の背表紙には全集の通し番号の「22」という数字が刻されている。また、今日でも保存の良いものでは、刊行当時のままに、箱の上に作者の名前、収載作品、顔写真が印刷された紙がぐりりと箱を完全に覆う形で被せられているものがあるが、その紙には「昭和文学全集 サファイヤ・セット」などと記されている。厳密に箱に掛けられたカバーまで保存している場合には、このシリーズ名で呼ぶこともある²⁹。

更に、一九八六年から一九九〇年にかけて、小学館から全く同名の『昭和文学全集』が刊行されるに至っては、小学館版との、出版社名の弁別のための名称とさえ誤解されやすい。六十年代の、全四十冊の、四六変形判の全集を、単純に角川版と呼ぶのは危険であると思われる。同じ角川書店版の二つの『昭和文学全集』を厳密に区別する統一的な名称が必要である。

猶、角川書店は、一九六四年の『昭和文学全集』の完結を最後に、この種の全集から早々と撤退してしまうが、一九七〇年前後に、『日本近代文学大系』という注釈付きの大型全集（全六〇巻、一九六九年〜七五年）を出している

ことは、近代文学にも注釈を施す時代が近づきつつあることをいち早く見抜いた例として、特記すべきものである。創業二五周年記念出版にふさわしい、大型の卓越した企画は、「十年近い歳月を、この企画の検討と準備にあ⁽³⁰⁾てたという。ちょうど四六変形版の『昭和文学全集』が刊行されていた頃から計画されていたわけである。そのようなことも考えあわせれば、明治・大正文学の集大成ともいふべきこの叢書は、『昭和文学全集』と共に、角川書店の日本文学全集を形成していると言えようか。

七

角川書店が、一九五二年から刊行を開始した『昭和文学全集』は、戦後の実質的な日本文学全集の濫觴であった。それだけに、出版計画も手探りの状況ですすめねば成らず、編集方針もしばしば変更を余儀なくされた。にもかかわらず、一定の期間内に、強固なまとまりを持つ全集を作り上げた角川書店の手腕は並々ならぬものがある。後発の、筑摩書房『現代日本文学全集』の完成度には叶わないものがあるが、先駆者としての地位は、いささかもゆるぐものではない。つづいて角川書店は、大衆化の流れを素早く読みとり、『現代国民文学全集』を続編のような形で刊行した。また、十年後の、四六版の新しい『昭和文学全集』

は、大衆化と共に視覚性も重視していた。さらに、高水準の注釈付きの『日本近代文学大系』をいち早く企画するなど、常に時代に先駆ける出版を行ったのが、角川書店の特色であろう。

ところで、一九五〇年代、六〇年代の文学全集の出版は、当初は小規模な出版計画で、売れ行きや人気を確認できた段階で、増巻に踏み切る例が多い。河出書房の世界文学全集などはその最たるものであるが、諸出版社の日本文学全集の類も、勃興期ともいふべき五〇年代のものにはその傾向が強い。

五三年に刊行を開始した筑摩書房の『現代日本文学全集』は、当初は五五冊としてスタートしたが、後に全九九冊の全集に改編された。また、新潮社が五九年に刊行を始めた七二冊の『日本文学全集』も、計画の極初期では六六冊の見通しであった。⁽³¹⁾

このような全集ものの場合、最終的に完結した形で論じられることが多い。出版社の総合目録でも実際に出版された形で記載される。社史のたぐいでも完成されたもので言及されることがほとんどである。大著『日本出版百年史年表』でも、スペースの関係から、刊行開始時点で、最終形態が示される。⁽³²⁾しかし、当初の企画や、その当時の出版事情や社会状況などは、それでは完全に知ることはできな

い。それらを補うのが出版広告や、内容見本類である。本稿は、これらの資料を生かそうとした試みでもある。

注

- (1) 拙稿「筑摩書房の日本文学全集の軌跡」(『香椎潟』四八号、二〇〇二年十二月)
- (2) 改造社の「現代日本文学全集」が出てから、もはや三十年近くになります。(中略) 明治に發して、三代を重ねた現代日本文学の全貌を展望し、吟味するには、今こそ最適の時期であると信じます。往年の成果を受けつぐに足る責任ある新全集が今こそ出されねばならないと考えます。(筑摩書房『現代日本文学全集』「刊行のことば」)
- (3) 角川書店も、『昭和文学全集』の「發刊の言葉」の中で、次のように述べている。
角川書店は業界の先輩、故山本實彦氏が昭和初頭に實踐された「現代日本文学全集」の偉業を繼承し、昭和時代の文学思想の體系を與へるべき「昭和文学全集」を最も廉價に、最も美本で世に贈らうとすることの重大さを痛感してをります。
- (4) 岡野他家夫『日本出版文化史』(春歩堂、一九六二年)五二〇ページ
- (5) 鈴木敏夫『出版 好不況下 興亡の一世紀』(出版ニュース社、一九七〇年)は、五二年秋からを、「消費景気下の全

集ブーム」と位置づけている。後述する如く、『昭和文学全集』の第一回配本が、五二年十一月である。

- (6) 和田芳恵『筑摩書房の三十年』(一九七〇年十二月)。ただし、和田の名前は奥付、表紙などには見えず、「あとがき」の末尾(二二一ページ)に記される。

- (7) 『昭和文学全集』の方は「昭和二十七年の出版にしては紙がよくなく」とも指摘される(松本秀夫『本の内そと——一つの回顧八十年』三月書房、一九八六年)。価格を二八〇円に抑えたこともあり、やむをえなかったであろう。

- (8) 筑摩書房の社名は、当初は藤村の「千曲川旅情のうた」にあやかっで、「千曲書房」と考えられていたのだが、臼井吉見の妻あやの、「センキョクと読まれるから、筑摩県の筑摩がいい。古田さんの故郷も、もとの筑摩県ですし」という言葉によって、現在の社名に落ち着いたという(注6書、一九ページ)。

- (9) 筑摩書房の側では、第一回配本を藤村にするか、芥川にするか迷っていた。さらに、他の出版社の企画と競合することについても、神経をとがらせていた。当時の筑摩書房社長の古田晁の姿は、松本昇平『業務日誌余白——わが出版販売の五十年』(新文化通信社、一九八一年二月)二四二、三ページ、「現代日本文学全集」と古田晁」に活写されている。

昭和二十七年、角川書店の「昭和文学全集」が売れている時で、第二次円本時代到来といわれていた。各社模索の時であったから彼(筆者注、古田晁)が私

(同、松本昇平)を利用する魂胆はよくわかる。(中略)

彼の話を要約すると、筑摩書房の「現代日本文学全集」は日本文学を体系づけた本格的な日本の文学全集であるが、新潮社はどのような日本文学か、河出書房の日本文学物はどんな内容のものか早く掴んで編集の打ち合いを避けたい、というのであった。(中略)

第一回配本、予定価、推定発行部数の調査と、彼と私の密会は次の日から毎日つづいた。立話し五分ぐらいで済んだ時もあったが、喫茶店で一時間、すし屋で二時間と一ヶ月もそうしたヒソヒソ会談のあと、その年も終わろうとする十二月末のある日、彼は突然狂暴になり酒気をおびて私の帰りを待ちぶせていた。そして例のグロープのような手で私の襟首を掴み、車で四ツ谷の福田家に連れて行った。

その時の話の内容は、新潮社は「長編小説全集」、河出書房は「現代文豪名作全集」で何れもカチ合わない。俺の方は、第一回配本を芥川にするか藤村にするかである。どっちがいいかここで決めろというのである。私は芥川龍之介なら二万部、島崎藤村なら五万部、藤村を第一回配本、芥川を第二回配本に組み、中間の三万でスタートし重版で伸ばす作戦はどうか、と話した。

猶、右とほぼ同様の文章が、野原一夫『含羞の人 回想の古田晁』(文藝春秋、一九八二年一〇月)六九ページに

見える。

また、河出書房、新潮社の出方に神経を払っていた古田の予想が的中したかの如く、五三年のベストセラーには、重厚な菊判三段組の『現代日本文学全集』『芥川龍之介集』と共に、手軽なB六版二段組の河出書房『現代文豪名作全集』『芥川龍之介集』も入る結果となった。

(10) ベスト10のデータは、出版ニュース社のものである。当時の『昭和文学全集』に言及したものを一、二挙げておく。

『昭和文学全集』宣伝につとめた結果、予約十五万から二十万を獲得して、当今随一の大当たりを誇った。(岡野注4書)

(11) 27年秋からは、角川書店の『昭和文学全集』、新潮社の『現代世界文学全集』が刊行を開始し、ともに約10万の読者を獲得、ベストセラーのトップを占め、翌年にかけて、全集の盛況・競争を現出した。(岩崎勝海『出版ジャーナリズム研究ノート』、図書新聞社、一九六五年)

(12) 日本の出版文化史において、円本時代が重要な転換点になったことについてはしばしば言及されるところである。

最近のものでは、『文学』二〇〇三年三・四月号の、小田光雄・山本芳昭による対談「円本の光と影」が面白い。

(13) 本稿四節で使用する、『昭和文学全集』の発刊時点の最初の内容見本には、「各巻平均二五〇頁」と記されていた。

注6書。岡野注4書では、これを十萬部として、別に『現代日本名作選』版を三萬部とする。多少数字に相違はあるが、筑摩書房の経営に寄与したことは間違いない。

(14) 五二年九月に刊行された『現代日本名作選』には、このうち、「朝の水」「夜の聲」「春の鐘」は収録されている。

(15) この選集については、拙稿「『川端康成全集』とNACSIS Webcat」(『文芸と思想』六七号、二〇〇三年三月)で言及した。

(16) 紀田順一郎『内容見本に見る出版昭和史』は、長谷部史親の『欧米推理小説翻訳史』などともに、活字倶楽部第一回配本として、一九九二年五月に刊行された。後、『紀田順一郎著作集』第八卷(一九九八年五月)所収。

猶、戦前の『世界文学全集』や『新興文学全集』のチラシや内容見本の資料性を生かしたものに、青山毅『文学全集の研究』(明治書院、一九九四年)がある。

(17) 第一期完結の半年後の五四年五月頃の段階では、第四次募集がなされているが、現実には、分冊買いは、早くから行われていたであろう。第一期第9巻の「川端康成集」の月報末尾には、全巻購読者に「夏目漱石集」贈呈の記事が見えるが、そこには「分冊買ひの方には進呈出来ません」と記されている。

(18) 紀田注16書でも言及されている。

(19) 最初の内容見本には「予約者のみに頒ちます」とあり、これが建前であるが、分冊買ひも当然あったであろう。注17参照。

この角川方式に対して、筑摩書房の方は予約金を取らない方針であった。『現代日本文学全集』の内容見本に挟み込まれた予約申込書には、「この全集は豫約者のみに配布

されます。豫約申込金はいりません」と記されている。

(20) 『現代日本文学全集』の第一回配本に「島崎藤村集」を第一回配本とするにあたって、古田晁が新潮社の佐藤俊夫専務(義亮次男)を訪ねたときの様子が、野原注9書に記されている。また、いわゆる『新生』事件で渡仏しようとした藤村が、旅費の調達に苦心していたとき、『緑蔭叢書』などの版權を新潮社が買い取って援助して以来、藤村と新潮社は深い関係にあった(『新潮社の七十年』『新潮社と文豪たち』七七ページ)。

(21) この点、約十五年後の一九七三、七四年に刊行された筑摩書房の『昭和国民文学全集』は、大衆小説だけで三〇冊の充実した編集を行うことが可能であった。猶、五十年代に『源氏物語』から別巻の『大菩薩峠』までという極めてユニークな『日本国民文学全集』を既に刊行していた河出書房は、六七年からカラー版『国民の文学』という時代小説中心のシリーズを刊行している。

(22) ただし、山本有三の『女の一生』が、両全集に重複して取られていることについては、五節でふれたとおりである。

猶、『現代国民文学全集』の翌年、筑摩書房も自社の『現代日本文学全集』の続編企画として『新選現代日本文学全集』を刊行するが、こちらははつきりと「各巻収録の諸作品は、いずれも既刊現代日本文学全集所収のものと、重複しないよう選択してあります」(内容見本)と記している。

(23) 加藤勝代『我が心の出版人 角川源義・古田晁・白井吉見』

(河出書房、一九八八年)によれば、角川書店としては、当時のベストセラー『大番』を収録しなかったようだ。実現していれば、第一回配本として圧倒的な存在感を示すことができたであろう。

(24) 『女であること』『川のある下町の話』ともに『昭和文学全集』刊行以後の出版であるので、刊行年次による棲み分けとも考えることもできる。

(25) 年譜の末尾に「前世紀の末年、一八九九に生れた私の年齢は、満だと数えやすく、年号の通りで、つまり紀元二〇〇〇年まで生きると百歳である」と記している。

(26) 角川書店では、この判型をカスタム版と称していた。『昭和文学全集』の内容見本には、「体裁 新装カスタム版・貼箱入」「カスタム版の誕生 デラックスをさらに上廻る高級な製本印刷。モダンな美術書のような新感覚のサイズ。読者のひとりひとりの御愛顧に応えて贈る、前例のない特別の判型です」とある。

ただ、カスタム版といっても、大きさは様々であったらしい。『昭和文学全集』は二〇センチ×一四センチであるが、同じくカスタム版と呼ばれた『カラー版日本の詩集』(六八年三月刊行開始。内容見本裏表紙には「体裁*カスタム版・函入美本」とある)は一八センチ×一六センチであった。因みに『角川書店図書目録(昭和20―50年)』(一九九五年)によれば、前者は「四六変型」後者は「A5変型」と記されている。

(27) 別冊のみをまとめて、瀟洒な帙に入れて、さらに紙箱に入

れて、「昭和文学アルバム」としたものを、時折古書店などで見かける。紙箱には「昭和文学全集付録」と記されている。紙箱の上部に小さく青地に「昭和文学アルバム」とあるのが「サファイヤ・セット」、赤地のものが「ヘルビー・セット」である。購読の特典として頒布されたものであろう。とすれば、本来は本誌に挟み込まれていた、月報にあたる昭和文学アルバムは、本体とは別にされて保存されていたことになる。一つの享受のありようとして注目される。ところで、このアルバムのセットには、挟み込みの小紙片がある。それには収載作家の一覧が載っているのだが、サファイヤ・セットの方は、実際のアルバムとは一人だけ食い違いがある。一覧表では、第18巻が井上靖集となっているが、これは変更されて後続のルビーセットに回り、変わって「安岡章太郎・遠藤周作集」が入る。この辺の経緯については、第18回配本「宮沢賢治集」に挟み込みのチラシで説明されている。

(28) 大佛次郎は、『現代国民文学全集』では、吉川英治の三冊に次いで、ただ一人、二冊を割り当てられていたから(第5巻が『赤穂浪士』、第12巻が『角兵衛獅子』ほか)、その感は一層強い。

(29) この一風変わったセット名であるが、第一回配本が九月であったことが名称の由来でもあるらしい。サファイヤ・セットの内容見本に次のように記されている。

サファイヤ・セット 九月の誕生石サファイヤの青を象どって、青く輝く背函が二十巻。これに続いて鳩血色(ピ

ジョン・ブラッド)のセットがあなたのお部屋を美しく飾ります。

後続のセットは、より一般的なルビー・セットの名称で出されることになるが、青と赤という二色の対比のセットは当初の計画であったのだろう。ただ、ルビーは七月の誕生石であるが、ルビー・セットの刊行は、十月からであった。

(30) 角川源義「創業25周年記念出版に際して」(『日本近代文学大系』内容見本)

(31) 拙稿「新潮社の日本文学全集の動静」(『香椎潟』四九号、二〇〇三年六月)

(32) 『日本出版文化史年表』(日本書籍出版協会)の一九五二年十一月の「刊行開始」の項に『昭和文学全集』(60巻)角川書店とあり、五三年八月の「刊行開始」の項に『現代日本文学全集』(99巻)筑摩書房(34年4月完了)とある。